

歌と写真で綴る薩摩の脇道 —歌三昧の史跡巡礼、その3—

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル
鹿児島大学 名誉教授
加治木温泉病院
県立大島病院

栗 博志・高田 昌実・萩原 隆二
納 光弘
夏越 祥次
栗 隆志

令和3年1月8日と10日に、桜島に冠雪を見た。次はいつ、雪に会えるか分からぬ。鶴丸城址を訪れると、冬景色ながら、元気な鳥達とも会えた。こんな機会は、めったにない。

今回は、史跡巡礼というタイトルとは、離れる事になるが、気分転換も兼ねて、できるだけ記念碑の羅列にならないように、注意を払い一つ、薩摩の地方の雪景色、鳥達の様子なども述べたい。

私事も若干、多くなるが、御容赦願いたい。

[第六章：桜島、照国神社、探勝園]

[1] 雪の桜島

1月8日に続き、10日には桜島は一層白く鮮やかに、雪が降り積っていた。普段は火山灰で灰色にみえる山も、雪には勝てず、山頂のみならず山腹までの雪景色で、新年にふさわしい景観となった。

ベランダの草木も、うっすらと薄化粧し、早

朝の空、桜島、そして、わずかに見える錦江湾のブルーのグラデーションが、印象深い。

177 あらたま年の初めの桜島 霞む曙 雪
は降りつつ

178 城山に吹く風さむし 初春の火を噴く山
に 白雪のふる

179 冬されば吹く風さむし 山高み 桜の島
に雪はふりつつ

180 初春に 積むや白雪 桜島

181 名には春 冬きたるかな 白妙の雪積も
りたり 桜島山

182 桜島 火を噴く山と思へども 山の上高
み 雪ふりにけり

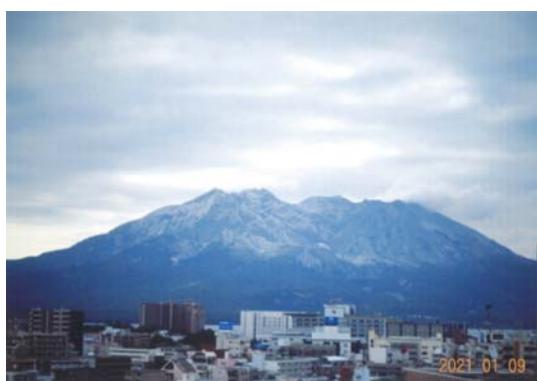


図84 令和3年1月10日 桜島の冠雪

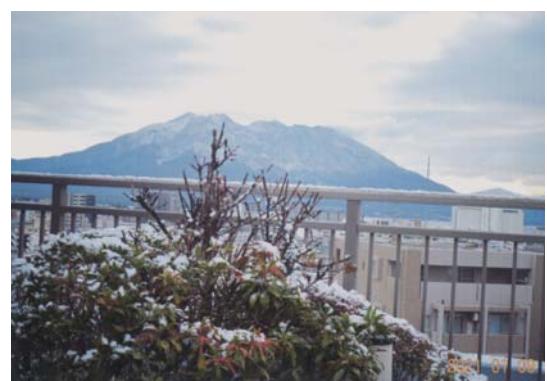


図85 桜島の冠雪とベランダの雪

183 雪つもる 山は氣高く尊くも 薩摩の島
を思ほすや君

184 浪の寄せ 潮騒響む砂浜の 波の彼方に
積むや白雪

[2] 江戸時代後(末)期から慶応4年/明治元年までの年表と若干の解説

- 1773(安永2)年、8代藩主重豪が藩校造士館を創設。その後、演武館、明時館、医学院などを設立。1833年、重豪没。
- 1811(文化8)年、豊後岡藩の田能村竹田が生玉(大阪)の持明院で、頼山陽と邂逅。以来、親交を深める。
- 1827(文政10)年、頼山陽、日本外史を出版。ベストセラーとなる(第二章、天璋院姫参照)。
- 1840-1842年、阿片戦争。アジアの大國、清国がイギリスに敗北。清国の国防の不備と欧州列強の脅威を、日本人に自覚させる。
- 1842(天保13)年、幕府は「薪水給与令」で、とりあえず欧米列強に対し、軟化策。
- 1851(嘉永4)年、斎彬、43歳で11代藩主となる。

図86、87は、明治5年の写真で、新波止砲台の案内板を撮ったものである。集成館は薩英戦争で、英艦の砲撃により焼失後、再建さ

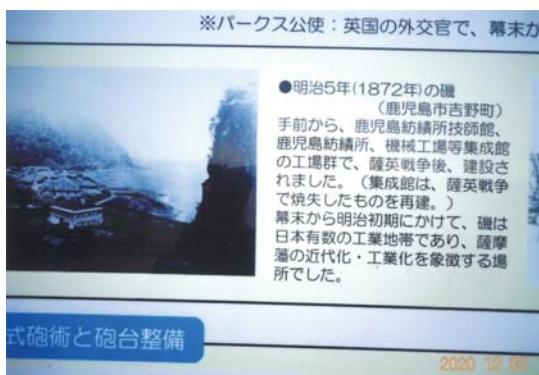


図86 明治5年の工場群
(新波止砲台の案内板より)

れたものであるが、もともとの集成館をよく示していると思われる。多数の外国人技師もみられ、外国人が珍しくない事が知られる。

1851年より洋式帆船建造に着手し、3年後、伊呂波丸完成。その後、洋式軍艦の昇平丸、更には独立で、日本初の蒸気船・雲行丸を完成。

1854年、「日の丸」が外国船との識別のための「総船印」として全国発布される。

図88は、前図と同じ案内板より撮影。仙巣園に展示されている、薩摩藩の150ポンド砲の模型の写真である。

大砲作製に必要不可欠の反射炉(当時、佐賀藩に建造されていた)建設は、なかなか成功しなかったが、「西洋人もなり 佐賀人



図87 明治5年の機械紡績所のイギリス人技師。
10数人の多人数。
(新波止砲台の案内板より)



図88 薩摩藩の150ポンド砲の模型。仙巣園に展示。
(新波止砲台の案内板より)

[隨筆・その他]

も人なり 薩摩も人なり」の斎彬の言葉に鼓舞され、1857（安政4）年、鉄製の150ポンド砲が完成。約70kgの砲弾の飛距離は3000m。

薩英戦争時、この2門の大砲が威力を発揮した。薩摩魂、当時、薩摩は日本では限りなく地方ではあったが、限りなく国際的であった事は、歴史の証明するところである。

この殖産興業策は1,200人が従事、大規模な工場群であった。1857年、これらの工場群は、「集成館」と命名された。

1858年、斎彬急逝。篤姫の夫・將軍家定の急逝の、わずか10日後の事である。

- ・1853（嘉永6）年、ペリー浦賀へ来航。
- ・1854（嘉永7）年、ペリー再来航。「日米和親条約」。ここに、3代將軍家光以来、200年以上続いた鎖国は幕を閉じた。
- ・1856（安政3）年、篤姫、13代將軍家定の御台所。
- ・1858（安政5）年、不平等条約「安政五ヶ国条約」。関税自主権の完全回復は、なんと日露戦争の勝利後の1911年の事である。
- ・1858-1859（安政5-6）年、安政の大獄。
- ・1862（文久2）年、生麦事件。久光の行列に乱入した、騎馬の英国人殺傷事件。
- ・1863年（文久3）年、薩英戦争。日の没まない世界の超大国、大英帝国と日本の一藩の戦争。薩摩藩は英艦隊に多大の損害を与え撃退。

この戦争で英國の力をまざまざとみせつけられ、薩摩藩は攘夷（外国を打ち払う）が不可能と認識、倒幕へと進む。英國も薩摩の実力を認識。

- ・1863-1864（文久3-4）年、下関戦争。長州藩とイギリス、フランス、オランダ、アメリカの列強四国との戦争。欧米は対日姿勢で連合。長州藩敗北。以後、長州藩も攘夷は不可能と認識。倒幕へと進む。
- ・1867年（慶応3）年、15代將軍慶喜、大政奉還。慶応3年12月9日、明治天皇、「王政

復古の大号令

- ・1868（慶応4/明治元）年、明治天皇、「五箇条の御誓文」。江戸無血開城、明治と改元。
- ・1868-1869（慶応4/明治元-明治2）年、戊辰戦争。旧幕府軍および奥羽越列藩同盟対薩摩、長州、土佐藩を中核の新政府軍の戦争。1月2日、幕府の軍艦が、薩摩藩艦を砲撃。これにより開戦。3日より鳥羽・伏見の戦いが開始。

幕府軍は、新政府軍の3倍の人的兵力を持ちながら、わずか5年前の薩英戦争、下関戦争の教訓を生かし、西欧の武器、技術を採用した新政府軍に敗北。

江戸城無血開城後の上野戦争を経て、戦闘は、北陸、東北に展開、最終的には、箱館戦争で幕府軍は敗北。土方歳三は戦死、榎本武揚らは降服。戊辰戦争は終結。

箱館五稜郭は、最新の西欧式の稜程式城郭であったが、制海権の要の開陽丸の座礁沈没と、大砲の能力向上（射程4,000m）により五稜郭が海上からの射程内になった事が、幕府軍敗北の要因となる。

以上、幕末の基礎知識のための、ごく簡単な年表を示した。

[3] 第11代藩主斎彬公像と照国神社

斎彬は、1809-1858（文化6-安政5）年、江戸後期から幕末の藩主である。

藩主に就くと、殖産興業・富国強兵策を行うと共に、篤姫を將軍家定に嫁がせ、国政に参画すると共に、西郷隆盛ら幕末に活躍する人材を育てた名君である。

集成館事業では、造船（蒸気船）、反射炉の建設を行い、ガラス、ガス灯、水雷、大砲の製造、蒸気機関の国産化などを推進し、日本近代化の礎を築いた。

享年50歳で急逝。

1863（文久3）年、「照国大明神」の神号が授けられた。斎彬の弟の久光と、その長男で



図89 齋彬公を祀る照国神社の本殿
日の丸は、総船印であった。



図91 齋彬公立像の台座
大砲や小銃、桜などのレリーフ。



図90 齋彬公立像
照国神社本殿の右隣に建立。

12代藩主となった忠義により、翌1864（元治元）年、神殿が造設。「照国神社」と称した。7月15、16日には六月灯（夏祭り）が行われ賑う。

図89は通常参詣する本殿である。

その右手の神社内の閑静な地に、城山をバックに、大きい斎彬公の立像が建っている（図90）。非常に大きい像で、大正6年に朝倉文夫により製作された。朝倉は、大分県出身の高名な彫刻家で、大分県出身の私としては、親しみ深い。

この像で注目すべきは、その台座で、その四面に集成館事業、殖産興業を示す大砲、小



図92 齋彬公立像の台座
帆船や歯車などのレリーフ。

銃、農業に関する斧、米俵、稻、木材、森林や帆船、歯車、碇、地球儀などが、図案化されレリーフになっている。2面を提示（図91、92）。

図93は、この地の雪の情景である。城山や古い社殿の屋根に、うっすら雪がつもり、風情がある。

斎彬公像の右手に大きい石碑がみられる（図94）。

これは、「戊辰之役戦士顯彰碑」である。戊辰戦争に関しては、年表を参照のこと。

この日本史の転換期の戦争では、薩摩から八千余名が参戦し、六百名を越える戦没者の他、多数の負傷者がでた。

この碑の説明文の末尾に「敵味方慰靈の念を込めて、この碑を建てた」とあるが、薩摩



図93 雪の斎彬公立像
右側に石碑と古い社がある。



図95 探勝園の電信使用の碑
斎彬による日本初の電信通信。



図94 戊辰之役戦士顕彰碑



図96 探勝園の古い電信使用の碑

人、日本人の情の深さを読みとれる。

そもそも戦争には、勝者、敗者ともにそれを正統化する、何らかの根拠が存在する。

例えば箱館戦争に関して：榎本らが蝦夷に向かったのは、4月の江戸無血開城後、5月の徳川家への対処が、駿河・遠江の70万石の減封という結果を見届けた後であり、約8万人の幕臣の将来を憂え、北方の防衛、開拓を名目に、蝦夷地の支配権確立、旧幕臣の移住計画が拒否されたため起ったのである。

照国神社の本殿は、多くの人が参拝するが、斎彬公の像の場所は、幸か不幸か、私の訪れる時は、いつも人影がなく静寂に満ちている。

185 ちはやぶる神の社は 安らげく静けくも
あり 訪う人もなし

186 ちはやぶる社の森の秋つ風 じんかん
人間の音 吹きけしにけり

この斎彬公像の地に隣接する探勝園には、「電信使用の碑」が建っている。

斎彬は、1857（安政4）年、本丸から、当時は二の丸の名園であった、この地までの間で、日本初の電信通信（モールス信号）に成功した。

線の長さは、500～600mという。小さい碑の右横に、大きい古い碑が立っている。上部は壊れており、多数の文字が刻まれているが、俄には判読できない。

[4] 探勝園と久光公、忠義公親子の像
「探勝園」は、もともと二の丸の名園で、

現在は公園となり、市民の憩いの場である。重豪の時代に造られ、「千秋園」と呼ばれた名園で、滝石組と池泉もあったという。

照国神社の右側に隣接しており、奥の斉彬公の像から表の方に歩いてくると、斉彬の弟の久光公の像、そして更に表の方に、久光の長男の、第12代、最後の藩主である忠義公の像が建っている（図97、98）。

- ・久光、1817-1887（文化14-明治20）年

- ・忠義、1840-1897（天保11-明治30）年

これらの像も、大正6年、朝倉文夫の作である。

忠義公のみ西洋式の軍服像である。父の遺言で、死ぬまで髪を切らなかったという。三体の銅像は、いづれも堂々としている。

久光は斉彬没後、藩主にはならなかつたが、藩主となつた忠義を、國父として補佐し実権を握つた、江戸末期～明治初期の薩摩藩の実質最高権力者で、朝廷と幕府の妥協を図る、公式合体運動の中心人物であった。

小松帯刀、大久保利通らを登用。西郷隆盛とは反りが合わず、遠島（徳之島、沖永良部島）したが、1864年に赦免した。

1862（文久2）年には、公武合体運動のため上京し、有馬新七ら薩摩藩の尊王過激派を肅静した（寺田屋事件）。

この頃、久光に倒幕の意志はなく、公武合

体派であった。

このあと、江戸にて幕閣と公武合体策の交渉に当たつてゐる（文久の改革）。

蛇足ながら、寺田屋事件は、もう一つある。1866（慶応2）年、伏見奉行による坂本龍馬襲撃事件で、寺田屋で入浴中、襲撃されたが、妻お龍の知らせで脱出に成功。薩摩藩邸に逃げ、傷の治療を受けた。その後、西郷の勧めで鹿児島にて湯治。日本初の新婚旅行である。

なお、1867（慶応3）年、龍馬と尊王派志士・中岡慎太郎は、近江屋で殺害された（近江屋事件）。

話が若干、前後したが、1862（文久2）年、文久の改革後、久光の江戸からの帰路、生麦事件が起り、翌1863（文久3）年の薩英戦争へと繋がる。

1866（慶応2）年には、イギリス公使、ハリー・パークスを鹿児島へ迎え歓待し、薩英戦争講和後のイギリスとの友好関係を、確認した。

久光の登用した大久保、西郷らにより（久光の意志に反し）公武合体は後退、倒幕へと進み明治維新を迎える。

1872（明治5）年の天皇行幸に際しては、新政府の改革、政策を批判する意見書を奉呈。その後、内閣顧問等を辞任している。久光は、廃刀令など急激な文明開化に反対し、髪と帯刀、和装を止めなかつた。

1877（明治10）年の西南戦争に於ては、政



図97 探勝園の久光公立像



図98 最後の薩摩藩主忠義公立像

[隨筆・その他]

府に中立を表明し、西郷軍に加担せず一時、
桜島に避難。明治20年、死去。享年70才。国葬。

忠義公の像は、洋式軍服姿である。帽子の中は髪である。図98の左奥に久光公の、更に左手のずっと奥に斉彬公像がある。

忠義は、斉彬の死後、1858（安政5）年、
第12代、最後の藩主となる。

父久光、西郷、大久保らに実権を掌握され、
積極的に主体性を發揮する事はできなかった。

薩英戦争では藩主として能く戦い、イギリスに一步も引けを取らなかった。

また戊辰戦争でも、倒幕軍の主力として活躍した。

1869（明治2）年の版籍奉還後は、薩摩藩知事となつたが、廃藩置県後は、公爵、貴族院議員となり、東京に在住、西南戦争にも関わらなかつた。1897（明治30）年死去。国葬。

忠義は、イギリスとの関係を良好なものとし、五代友厚など留学生を送つた。陸海軍の強化に努め、紡績技師を異人館に招き、磯に日本最初の紡績工場を作つた（図87）。

[第7章：薩摩の地方の雪景色]

187 寒さ耐え 明けた早朝は雪景色

188 厳しさの 後なる里の雪げしき その趣
きぞいよよ優れり



図99 令和3年1月9日早朝の雪景色

189 おもしろう降りたる里の雪景色 などて
かその情ましまさむ

令和3年1月9日、鹿児島にわずかの積雪をみた。然し一步はなれた地方では、見事な雪景色であった。忘れ難い朝であった。

190 寂しさの優れる街の冬の朝 光かがやく
銀世界かな

[1] 駅舎とその周辺の雪景色と鳥達

1月9日の早朝、駅舎からあたりを見渡すと、モノトーンの一面の雪である。

191 早起きは 三文の得 雪の朝

192 寒き朝 三文の得 雪積もる

193 冬の朝 駅に降り立つ 駅前は色無き世
界 雪げしきかな

194 朝日差し 里の奥なる山並の 今日みる
姿 厳かなりし

駅舎から一直線に、どこまでも延び、地平線の彼方の山並にすい込まれる線路と、それに沿つて立ち並ぶ、ビル並は、遠近法のお手本のような構図の雪景色で、ドーンコーラス



図100 駅舎から一直線に延びる未明の線路



図101 「雪と光のコンチェルト」

(dawn chorus) がきこえてくるような、雰囲気を醸し出していた（図100）。

何となく、このままでは終るまい、という気分になり、朝日が昇るまでゆっくりと外を眺めていると、予期せぬ光景が出現した。薄暗い色のビルが、雪の中で、朝日を浴びて一斉に照り輝き始めたのである（図101）。

遠望する山並の上の空気までもが、銀河系のように淡く輝き、言葉に言いあらわせぬ景観に驚かされた。何よりも、自然と競合する人工の産物であるビルが、自然の中で、光彩を放っている事に、自然のもつ奥深い包容を感じずには、いられなかった。

195 朝日あび 照り輝ける街のビル 雪の彼方にすいこまれけり

196 雪のビル 光の魔術に魅せられし

駅前広場も数cmの雪が積もり、一面の銀世界である。早朝で人影もない。



図102 雪の中の2羽の鳥

雪の中、2羽の小鳥が目に入る。寒くないのだろうか？ それとも朝日の中、私共と同じように、雪を楽しんでいるのだろうか？ きっと雪を楽しんでいるのだろう。

197 二羽の鳥 何を思いて 雪の中

198 鳥達も 白き景色を楽しめり

199 寒くとも 朝日浴びたり 小鳥かな



図103 天仰ぎ 春を待つ鳥 雪の枝

200 我ときて 遊べや雪の中の鳥 (一茶風に)

小鳥達はいっこうに逃げる様子はない。視線を上に向けると、雪の木の細い梢に、大きい一羽の鳥を認めた。トンビだろう。

目の前に、トンビがいるのに驚かされる。遠くを眺め、春の来るのを待っているようにも見てとれる。

その悠然とした姿は、剣豪武蔵の「枯木鳴鶲図」を想い起こさせる。今も昔も、冬の厳しさに立ち向かう、鳥達の姿は変わらない。

空の彼方を眺めるトンビを真似て、私も空の彼方に視線を移す。

201 雪の枝 トンビの姿 みつけたり

202 枝の鳶 とび 空の彼方を眺めけり

203 天仰ぐ トンビを真似し 天仰ぐ

204 冬鳥の厳しさに耐え 梢かな

205 雪積る枝に止れる冬のトビ 悠然として
天を仰げり

206 悠然とトンビの枝に止りたり 寒さ厳しき
冬の朝なり

207 天仰ぎ 春を待つ鳥 雪の枝

[2] 田舎道にて

農家の庭先の枯葉を残す木々にも、雪が積っている。全てが雪に覆い隠される。雪の梢は、朝日に輝いている(図104)。

ただ、日を浴びるほどに、輝けば輝くほどに、雪の華は夢く消え去る。

無常という他はない。

然し、この無常観こそが、日本の伝統美に他ならない。

生きとし生けるもののみならず、全ての自然の中に、無常が潜んでいる。

208 枯れ枝に 雪の積りて 花盛り

209 雪の華 朝日を浴びて煌めけり

210 あらたまの年の初めの枯木にも 白雪の
華 咲きにけるかな

211 風寒し 桜と紛ふ白雪の 朝日あびたる
冬の朝かな

212 雪の華 やがて散りゆく 定めかな

213 枝の雪 やがて消えゆく 雪かな



図104 農家の庭に雪の花が咲く

214 朝日あび 僮なく消ゆる雪の花 誰ぞ愛
め
するか 冬の朝

215 雪の華 とけて消えなば 桜花 舞いて
散りゆく春ぞ来にける

田舎道を歩いてみると、すでに車で道の雪
は溶けていた。しかしあたりの木々や竹林に
雪は残っている。普段は緑色の竹林も、今日



図105 雪が積り朝日に輝く竹林の上をトンビが
飛び去る

は、朝日を浴び黄金色に輝いている。

頭上をトンビが飛んでゆき、竹林を越えて
飛び去った(図105)。

216 雪の里 朝日に映ゆる竹林 一羽のトン
ビ 飛び去りにけり

217 竹林 その上越えて行く鳥の 目指すは
何処 冬の空

[3] 幽玄

[2]では、自然の光、特に朝日に関して述べ
たが、ここでは、幽玄の世界について考えたい。

幽は、奥深く、静寂で何とも言えぬ深み、
を意味する。玄は、「黒」を意味する。黒と
いっても、奥深く、明かりの及ばぬ所の色で
ある。つまり色の無い色である。

何らかの形で幽玄をあらわすとすれば、一
つには能であるかもしれないが、最も端的に
表現するのは、モノトーンで表現される山水・
水墨画の世界であろう(図106)。



図106 「幽玄」

[隨筆・その他]

水墨画と言えば、雪舟（1420–1506年）が、よく知られているが、その画は幽玄ではなかろう。ほとんどの雪舟の画は、その描く線が強すぎ、幽玄とは遠い所にある。

最も適確に幽玄を代表するのは、言うまでもなく、等伯（1539–1610）の「松林図屏風」である。

天心の理念に従い、大観らにより探求された「朦朧体」つまり没線描法による「光」「空気」観の表現は、（もちろん彼らが、それを目標としなかったであろうから）幽玄に近似していると言え、そうでもなかろう。

つまり、今まで、幽玄の描写に成功した絵画は、ほとんど無いと思われる。

現代は、科学の進歩により、人工的な光と色に満ち溢れている。

現代人の五感は、より強い刺激を求め、それにどっぷり浸っている。

科学の進歩に伴い、この傾向は一層、助長される。刺激は更なる刺激を求め、その欲求により、更なる刺激が生み出される。

味覚は激辛、聴覚は交錯する光の中での大音響、スポーツなどは、より過激・苛酷に、そして、人は、群衆の中、喧騒の中に、身を居かなければ、耐えられなくなるのである。

五感は、強い刺激に慣らされ、自然のしみじみとした光と陰に、寄り添う術を失う。

等伯（とその一派）は、狩野派の豪壯華麗な手法を手中に収めると共に（仏涅槃図、金碧障壁画の「楓図」など）牧谿らの水墨画にも影響を受け、「松林図屏風」を描いたわけであるが、思うに彼は幽玄の世界を描こうとして、この画を描いたのではなく、たまたま目に見える現実の世界の感動を、そのまま描いたものだろうと、私は推察している。

人は、そもそも幽玄など関心もなく、気にも止めないので、それに気付かないのである。

無彩色の幽玄は、中古の「もののあはれ」を引き継ぐと共に、その根幹は中世に進展し、

発展した美的理念である。有心幽玄 長高し。

私は、70歳を超えて初めて、その世界に遭遇したような感覚に襲われた。

それは、朝霧に煙る竹林の前の老木に止る一羽の鳥の情景である。

もし、この風景の中に、この鳥がいなければ、ただ朝霧にかすむ風景として、見過されてしまっていたんだろう。

老木の上に、躍動する生命が、冬の厳しさに耐えて、背景の朝霧に溶け込み、一体化している姿が心に沁みる。

218 モノトーン 朝霧の中 竹林

219 老木に止まる鳥や 竹林

220 見上げたる老木の枝 鳥のある 朝霧煙
る竹林かな

221 冬の朝 霧立ちのぼる竹林 静寂にして
幽なるなりき

222 冬鳥の厳しさに耐え 朝霧の古木に止ま
り玄さらに玄

223 老木に 一羽の鳥のありければ 幽さら
に幽 玄更に玄

224 竹林 幽極まれり 鳥の影
(宗博)